心殘りに思ふべし。
され共人は幼な頃
神より受けし此犬齒
汝の肉を好むなり、
我れを鷹ぞと思ひなし
遂はず彼の世に行けよかし、
可憐の首の關節を
手輕く一寸捻ぢ外す
忽ち彼は事切れぬ。
是も背中に吊り添ひて

漸やく出でぬ高原に。
遙かに注ぐ彼の川は
まがふ方なき武庫川、
眼下に見ゆるは箕面山
冬の景色の靜かさよ、
中山こゑて寶塚
烟立つ竈は溫泉か。
田畑は遠く果てしなく
中に散りばむ壁瓦
農家の里の美くしさ。

南に微か大阪は
烟の霞に覆はれたり。
眺めつ開く辨當の
甘さに何時か世を忘れ、
香ばしき煎ハ茶は無けれ共
あそこの谷にて水呑まん、
エスも貰へりむすび三つ
かぶりてペロリ呑み込みぬ。
……
今は獲物も十二分

又來る日曜を樂しみに
あそこやそこの淺山も
殘しをかなん捨てをかん。
震ひる寒さに起き上り
いざや是より歸らなん、
右手の山の背を傳ひ
彼れなる森邊に下り着かん。
嶮しき山の背此所の原
悠々高く歌ひ行く、
短かき冬の半ばとて

日は西山に傾きて
日影は谷間を埋もせり、
向ふの林は山鳥や
尾崎の野山は雉子住まん。
下り盡せし田の邊り
俄かにエスは立止り
狙ひ鮮やか駈け込みぬ、
忽ち二羽は舞ひ立てり
弱れごきたひし此腕ひな
一羽は遂に打ち臥せぬ。

此所より道は岸や畑
漸て縣道に出でにけり。
軒邊に遊ぶわらんべや
畑に鍬持つ農夫等も
行く先々につどひ來て、
「まあ迎山の鳥なるよ
ありや山鳥だ雌雉子」と。
物知り顔にそれぞれに
名付けて囃さぬ者はなし。
さすがに張りし气も緩るみ

足は繩なふ心地して
しどろもどろに弱り果て
家路を指して歸りけり。

……

仰げば狩場は夕暗に
ほのかに姿を現はせど、
夕日は最早六甲の
山巓遠く消ゑ去りて、
紅ひ黄色の片雲を
遙かの空に殘すのみ。◎

◎月神

登れる月に星かくれ
黄金の如き其光り、
後所此所に影播きて
青き野原の上に輝る。

斯くも靜けき宵の間に
小森の陰に獨り寢て、
夢にも遇はぬ婀だ神の

接吻に觸れし人の子よ。

女神の接吻は人の愛
求めぬ時の贈物、
言はず語らず、知らぬ間に
深き情けの一凝視。

ア、憂ひに沈むものよ
ア、患難と恐れの下に、
疲れし頭を低る者よ
汝も愛せらるゝなり。

如何に運命描なきも
如何に此世は淋しきも、
知らぬ情けの友ありて
其身の憂さに應ふらん。

田舍娘の戀

麥を刈る日は麥の香に
君のかをりをしのぶかな、

（生田春月）

まだ青かりし畝ねの間に
われを抱きしは誰れなりし、
やゝ黄ばみたる穂の影に
かくれ去りしは誰れなりし、
ひとり名殘の香をたづね
麥を刈る日のわが思ひ、
いかに心はつれなくも
刈られし麥を如何に見る、
この刈られたる穂の如く
いとも短かき戀なりし。

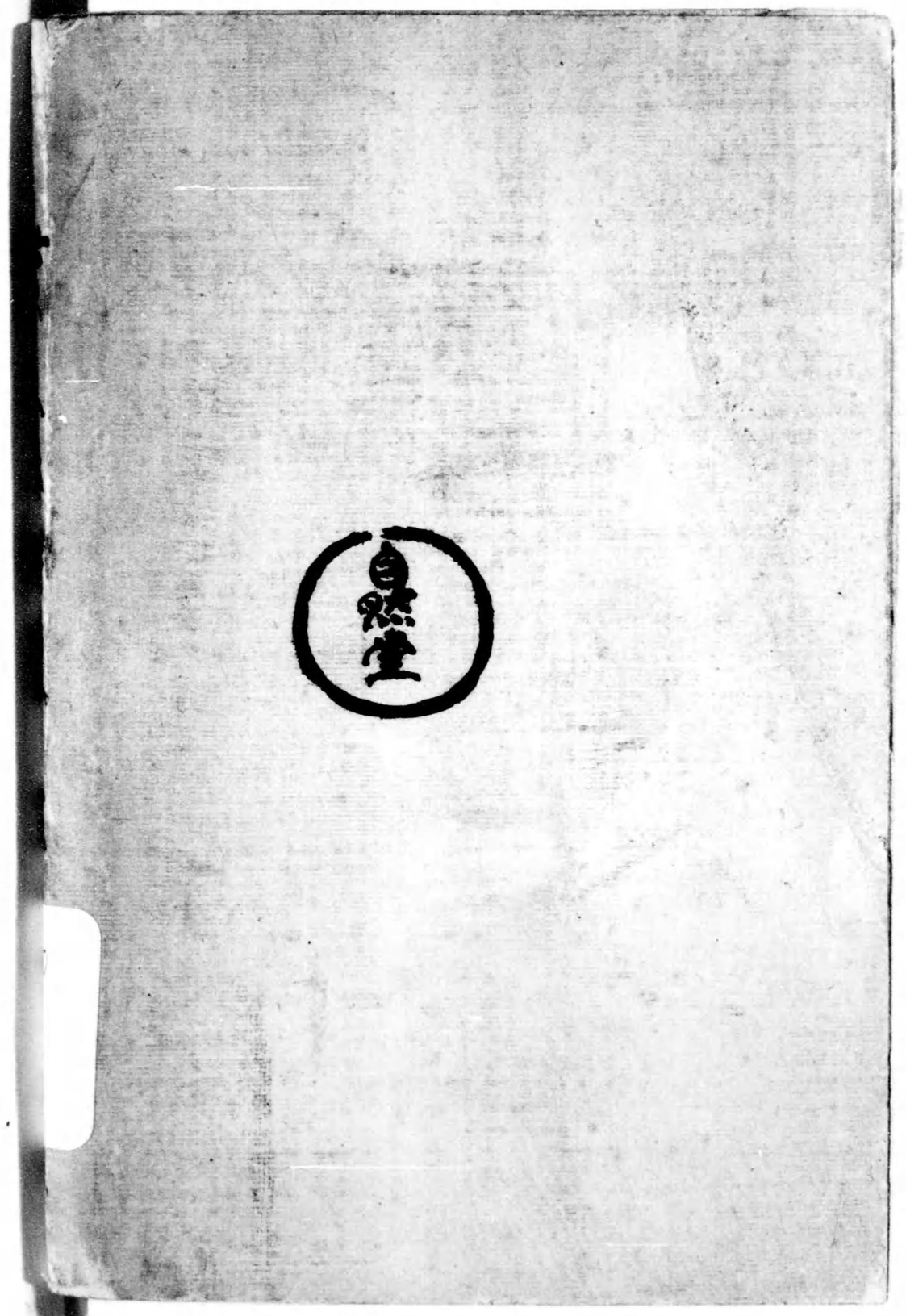
大正七年七月十五日印刷　（定價五十錢）
大正七年七月二十日發行　（郵税四錢）

著作兼發行者　大阪府東成郡中本町中濱四百八十八番地　岩部只市
大阪府東成郡中本町中濱四百八十八番地

版權所有

印刷所　自然堂印刷所
（印刷人）　岩部只市

發行所　大阪府東成郡中本町中濱四百八十八番地　自然堂

275
1940

終